広報

あらお 特別号

2023

地域を支える 私のまちの 輝く人たち

広報 あらお 特別号 2023

SPECIAL ISSUE 2023
令和5年4月発行

【発行】荒尾市役所　総合政策課　広報統計係
〒864-8686　熊本県荒尾市宮内出目390
☎ 0968-63-1157　FAX 0968-64-0940　✉ kouhou@city.arao.lg.jp
（編集・制作　株式会社有明ねっとこむ・株式会社NOTE）

UD FONT by MORISAWA

私たちの輝く未来

その実現のために、さまざまな事業に取り組んでいます！

あらお海陽スマートタウン
（競馬場跡地）イメージ

あらお海陽スマートタウン・荒尾駅周辺地区のまちづくり

工事と民間施設の誘致は順調に進んでおり、集合住宅（約1ha）や商業施設（約2.7ha）が立地予定です。「道の駅」と「保健・福祉・子育て支援施設」を複合化した「荒尾市ウェルネス拠点施設（仮称）」のPFI事業者も9月に決定する見込みです。
また、荒尾駅全体のリニューアルを含めたバリアフリー計画と駅周辺の沿道利活用計画の策定を行い、荒尾駅と「あらお海陽スマートタウン」が一体となった新たなまちづくりが進んでいきます。

2022年12月

新市民病院が10月に開院

病床数は274床あり、一般病床は全室個室、屋上へのヘリポートの設置、感染症の流行・まん延に備え、1病棟37床を感染症病棟に変更できる造りを整備するなど診療機能、施設機能を拡充し、新しい市民病院「荒尾市立有明医療センター」が10月に開院予定です。
さらに、荒尾市で安心して出産できる環境づくりとして、新病院と市内産婦人科医療機関が一体となった周産期医療の仕組みづくりにも取り組んでいきます。

荒尾のまちの未来がより輝くよう、これからも取り組んでいきます！

地域を支える私のまちの輝く人たち

ここ荒尾には、さまざまな想いを抱き、地域を支えようと活動している人たちがいます。
「広報あらお 特別号」では、目標に向かって取り組む「輝く人たち」をご紹介します。

1 Arao Star 地域活性化を目指す人たち

+Ba プラスバ

代表 吉丸健児さん

**楽しめる場所を作りたい
自分たちで作り上げた
笑顔が集まるプラスの場**

八幡小学校前交差点近くのコンビニ跡地でキッチンカーなどが集まり、フードや雑貨を販売する「+Ba（プラスバ）」。主に土日祝日に開かれ、ピザ・クレープ・たこ焼きなど、集まるキッチンカーや出店数は毎週さまざまです。普段、自動車整備などをしている代表の吉丸（よしまる）さんは友人にキッチンカーの製作を頼まれ、調べるうちに自分もハマってしまいます。以前は整備工場の一角をキッチンカーでの販売スペースにしていましたが、安全性も考えて現在の場所へ移り、+Baとして新たなスタートを切りました。

「とにかくお客さんに楽しんでもらいたいので、飲食や雑貨・癒しスペースなど"今週はどんなお店が集まっているかな?"とワクワクしてもらえる空間を作っています」と、みんなの笑顔が集まる場所づくりに奮闘する吉丸さん。素敵な場所や魅力的な人がたくさんいる荒尾をみんなにもっと知ってもらいたいと、今後は出店だけでなく、イベントや行事にも場所を提供したいと考えているそうです。

中村光成（なかむら みつなり）さん
山本翔夢（やまもと とむ）さん

グランピングやバーベキューも楽しめる屋上♪

のあそびlabo（ラボ）

荒尾駅前が賑わう「のあそびマルシェ」▼

▲1階のカフェは個展やワークショップなどにも活用できます。

"のあそび"がテーマの地域の交流拠点づくり

荒尾駅前でホテル・カフェ・コワーキングスペースなどを備えた「のあそびlodge（ロッジ）」。このビルをDIYでリノベーションしたのは市内でクリニックを営む医師の中村さんが登山仲間と設立した「のあそびlabo（ラボ）」です。中村（なかむら）さんは荒尾で長年暮らすうちに"医療以外でも人材育成やまちづくりで地域に貢献できないか"と考えるようになり、アウトドア経験を活かした地域の交流拠点作りを始めました。活動はビル内にとどまらず、荒尾駅前などでさまざまなイベントを開催しています。

「ビルが完成しても、まだまだ変化し続けます。いろんな人に参加してもらい、活動を広げていきたいです。荒尾駅前を活性化して、荒尾をもっと元気なまちにしましょう!」と中村さんは力を込めます。

荒尾飲食店組合

ご当地ハイボールで飲食店の元気を発信!

荒尾に名物ハイボール誕生!

ジョッキに注がれた黒いドリンクに、ぽっかりと浮かぶ黄色いレモン。思わず惹きつけられるインパクトあるドリンクは、荒尾飲食店組合が開発した、ご当地ハイボール『万田』。「コロナ禍の沈んだムードを吹き飛ばすようなメニューで、お客さんや飲食店の仲間たちを元気づけたい」という想いから生まれ、組合加盟店舗の一部で提供されています。

開発したのは、組合長の源嶋（げんじま）さんと、組合長を長年務めていた初代の名物組合長の谷川（たにがわ）さん。石炭をイメージした黒色のハイボールに、黄色いレモンで"炭鉱から見上げるお月さま"をイメージ。「せっかくなら世界遺産の『万田坑』にちなんだものを作りたいと思って、フードはジャンルがあるけど、ドリンクなら同じ味を提供できるでしょ?」と笑顔で話す源嶋さん。

現在、組合では30代～80代まで、幅広い世代が活躍中。定例会での近況報告から、悩みを打ち明ける相談相手として、互いに支え合い、地域に愛される店を守り、飲食を通じた地域活性化を目指し、日々奮闘しています。

組合長 源嶋博史（げんじま ひろし）さん

※撮影時のみマスクを外しています。

「高校生食育アドバイザー」活動の様子▶

会長 内田（うちだ） 保代（やすよ）さん

お腹が満たされたら
自然と笑顔になれる♪
食の学びは奥が深い
ですよ!

荒尾市食生活改善推進員協議会

食を通じ、健やかな地域を育む

荒尾市食生活改善推進員協議会は、〝私達の健康は私達の手で〟をスローガンに、食を通じた健康づくりを推進するボランティア団体で、現在73人の会員が所属。これまで小学生の親子や高校生・男性・地域住民に調理実習を行ってきましたが、近年の感染症による不安で、会を辞めたいとの声も上がりました。「免疫力を高める食こそ大切にしたい」と活動を見直し、目的別のチーム体制を取り入れて再始動。時短レシピ作成チーム、高校生の食の関心を高める高校生チーム、イベントの企画を担当するイベントチーム、中学生の食の課題解決に取り組む中学生チームを編成すると、これまで以上に細やかでダイナミックに活動が広がっているそうす。

アイデアや人とのつながりで地域を育む活動に、これまで以上の期待が寄せられています。

ふぉーちゅんサークルあらお

食で地域をつなぎ、幸運をもたらすフードパントリー

子ども食堂がコロナ禍で活動自粛が続くなか、フードパントリーという食料や物資を配布する活動が全国で広がりました。市内でも、感染症拡大の影響を受ける家庭への支援として、ボランティア団体「ふぉーちゅんサークルあらお」がフードパントリーを開催。

きっかけは、突如荒尾を襲った豪雨災害でした。それまでボランティア活動をしたことがなかった西山（にしやま）さん。「これは流石に見過ごせない!」と初めて参加し、そこでいただいた「ありがとう」の声に感動。災害による被害も落ち着いてきたころにフードパントリーを知り、個人でもできると知った西山さんはすぐに行動。試行錯誤をしながら準備を進め、仲間や地域の皆さんの協力もあり、実現できました。

「想像以上の反響で来場者も喜んでくれました」と話す西山さんは、フォーチュン(幸運)と名付けたこの会で、今後も市民の皆さんに幸運を運びます。

▲企業や農家から提供してもらい、食品ロス削減にも繋がります。

▲12月24日のイベントではサンタも登場♪

男女共同参画フォーラムにも参加しました▶

代表 西山（にしやま） 親也（しんや）さん

※撮影時のみマスクを外しています。

▲梨の香りと味を生かした「梨スムージー」。隠し味は自家製の梨バタージャム♪

大渕（おおぶち） 峰昇（たかのり）さん

Arao Star 2

食で地域を支える人たち

ぶちスタンド

特産品を守りたい!廃棄梨を活用してフードロスゼロを目指す

野原地区の県道208号線沿いにある大渕（おおぶち）梨園の直売所のオシャレなバス「ぶちスタンド」。同園の4代目を担う大渕さんが「荒尾の特産品である梨の美味しさをスムージーを通じて広めたい」と始めた廃棄梨を使ったスムージーが話題のキッチンバスです。

農園の仕事とキッチンバスの二足のわらじで活動する大渕さんが、社会人経験を経て挑戦へと舵を切ったのは〝将来的に農園を継ぐ〟という強い想いがあったから。

「温暖化の影響で、年々日焼けする梨は増えています。傷んだ部分を取り除けば、美味しさは変わらないのに捨てられてしまうのはもったいない。僕の目的は、あくまでも廃棄梨を生かすこと。多少の困難はあっても諦めるという選択肢はありません」と大渕さんは揺るぎない想いを語ります。

そう遠くない未来にカフェの実店舗を開き、地域に約100軒ある農園の廃棄梨の利活用に取り組みたいと話す若き挑戦者の活動は、大渕梨園の梨のように大きな可能性を秘めています。

Arao Star 3

地域を守る人たち

団長 西田（にしだ） 学（まなぶ）さん

荒尾市消防団

▲毎年、消防出初式では気を引き締めて防災活動に尽力することを誓います。

大切なのは、一人ひとりの「防災意識」

熊本県全域に大きな被害をもたらした令和2年7月豪雨。市内を流れる関川の氾濫で深瀬地区をはじめ、多くの市民が避難生活を余儀なくされました。

「災害時に必要なのは、まず正確な情報を集めること。当時、副団長を務めていた私は、市の災害対策本部で情報収集係として、各エリアの分団から届く情報を集約し、団員たちの指揮を取りました。市民と団員のリスク管理をしながら瞬時の判断を求められる状況は、葛藤の連続でした」と振り返る、消防団長の西田（にしだ）さん。

消防団では、市全体で20代から70代まで400人以上の団員が活躍中です。「親子ほど年の離れた団員たちと〝地域を守る〟という目標に向かって訓練を続けています。もしもの時には一丸となって人命救助に徹する消防団の活動に、大きなやりがいを感じます。日頃から〝防災〟を意識することが一番の防災です」と語る表情には、団長としての使命感がにじんでいました。

▲定期的に消防団分団長部長会議なども行われ、災害時に備えます。

▲新入団員の座学の様子。人材育成にも力を入れています。

▲「ポンプ操法」の速さや正確さを競う全国大会に出場したことも!

荒尾市自主防災組織連絡協議会

安心安全は当たり前じゃない 長期的な視点で人材育成を

各地区の連携を促すために発足した荒尾市自主防災組織連絡協議会。コロナ禍での立ち上げとなり、思うように活動できませんでしたが、今後は防災情報の共有や定期的な防災訓練を行うそうです。

「訓練はやらなければ身に付きませんし、やってみることで分かることもあります。〝教育は国家百年の大計である〟という言葉があるように、100年後の地域のために、長期的な人材育成が重要です」。そう語る会長の宮崎さんは、登校する子どもたちの見守りを何十年も続けています。子どもたちに注ぐ温かな眼差しも、そこで交わすコミュニケーションも、宮崎さんなりの防災活動です。安心・安全は、当たり前ではありません。危機意識を引き継いでくれるリーダーがひとりでも多く育つことを宮崎さんも願っています。

会長 宮崎（みやざき） 司（つかさ）さん

東屋形区一丁目 地域安全パトロール隊

日頃の活動の積み重ねが 地域の防犯意識を高める

東屋形地区に住宅が建ち並んだ当初に結成した「東屋形区一丁目地域安全パトロール隊」。その活動は、20年以上も続いています。「当初は、地区の名前を知ってほしい、地域の人々の防犯意識を高めたいと活動を始めました」と話すのは、3代目の隊長を務める濱北（はまきた）さん。隊員と月に数回、21時頃から地区内約3㎞の道のりの見回りをしています。「不審なものや人はいないかはもちろん、一番大事なことは、住民にも、通りすがりの人にも、〝パトロールをしている私たちの姿を〟見てもらうこと〟です。見られることで、地域全体の防犯意識は高まります」と濱北さんはパトロールの大切さを教えてくれました。減少傾向にある次世代を担うパトロール隊員の参画を心待ちにしています！

濱北（はまきた） 竹夫（たけお）さん

中央小学校見守り隊

子どもたちの安全と「元気」を見守る、地域のお父さん

民生委員や大和地区の区長、老人会の会長など、さまざまな役を担う石田（いしだ）さんが「中央小学校見守り隊」を始めたのは、今から23年前のこと。福岡県庁を退職後、地域への恩返しとして、先輩の後を継ぐ形で始めました。以来、毎朝同じ交差点で子どもたちを見守っています。新学期が始まる4月から5月は小学校と連携して、道路の渡り方の指導もするなど、熱心な姿勢はまさに〝地域のお父さん〟的存在です。

「朝の遅い時間にうなだれて登校しよる子には〝朝ご飯は食べたか？〟と声をかけます。いつもと様子が違うところはないか。元気な挨拶が返ってくるか見とるんです」長年見守り続けてきた石田さんの原動力は、子どもたちへの深い愛情と〝良い荒尾にしたい〟という真っ直ぐな願いです。

石田（いしだ） 豊吉（とよきち）さん

※撮影時のみマスクを外しています。